



剣道部で知った オン・オフの切り替え

—— 灘中・灘高では剣道に打ち込んだとお聞きしました。どんなことを学ばれましたか。

上 剣道の部活動を通して自分で考えることの大切さ、そして指導者がいかに大事かを学びました。剣道部では兵庫県警の師範の田中康俊先生から指導を受けましたが、先生は闇雲に長時間練習させる人ではありませんでした。教育者として生徒に鞭を入れる時間が短時間だったのです。

真面目な生徒はうまく行かないとずっと練習に励んでしまうものですが、先生は長時間、練習してもだれるだけと考えていました。オン・オフの切り替え、休むことも大事と教えてくれました。その教えを守り、とにかく時間を区切って剣道に集中しました。その結果、灘中時代、ある大会で初めて優勝できました。神戸市の東灘区の小さな大会でしたが、優勝はとてうれしいことでした。私の一大成功体験です。

東京大学理科三類合格よりもうれしかったです。灘高には東大に進むシステムがあり、大学受験に関してはそのシステムに沿って勉強しただけで、自分の力でやり切ったという満足感、高

揚感はありませんでした。

東大進学のシステムには良し悪しがあると思っています。それに乗っかって勉強することは合格の近道になる半面、自分で考えることを放棄してしまう恐れがあるからです。私は幸いなことに剣道部で、自分で考えることの大切さやオン・オフの切り替えを使つて休むことを教えてもらえました。オフの時間にさまざまな芸事やスポーツに挑戦してみることは、将来の肉体的な幅広さにつながっていくのだと思います。

自分で考えることの大切さは這い上がることへの原動力にもなります。高校時代、野球の強豪校でレギュラーとして活躍した選手も、意外と米国のメジャーリーグでは苦戦するものです。上原浩治、元広島の黒田博樹は、高校時代控え投手で、自分で考え、必死に這い上がってきた選手たちの代表といます。

大学OBと交流し知った 国家権力は抑制的に使え

—— 東京大学では医学以外にどんなことを学びましたか。

上 大学時代は剣道部と医学部のコミュニティに入りました。剣道部では、有力OB3人に、毎月手紙を送るとい

担任の勧め受け 難関の灘中に進学

—— 上先生は名門の灘中・灘高を卒業後、東京大学医学部に進まれましたが、子どものころはどのような生活を送られたのですか。

上 私は名勝「舞子の浜」で知られる風光明媚な神戸市の舞子で生まれ、その後、父の仕事の関係で加古川市に、そして10歳のころ尼崎市に移りました。

転校先の小学校で4年生のとき、母親が担任の先生から、こう言われたそうです。「神戸市の灘中学校に行かせなさい。入試で合格させるため塾にも通わせなさい。公立中に行かせたらだめですよ」と。そこで灘中合格で高い実績のある西宮市の塾、浜学園に通うようになりました。私自身は担任の先生から、「授業中は、構わないから、浜学園の宿題に取り組みなさい。必ず灘中に行きなさいよ」と言われていました。

1970年代、オイルショックが世界の経済に大きな混乱を与え、日本の繊維が競争力を失っていったころ、父は兵庫県加古川市に工場があるニッケという会社で働いていました。サラリーマンの父は、いずれは私を加古川市の旧制中学校だった県立加古川東高

う慣習がありました。私が担当させていただいたのは、安田講堂事件のとき医学部長だった中井準之助先生、京都女子大学の学長を務めた仏教学者の結城令聞さん、内閣官房長官などを歴任した元国会議員の赤城宗徳さんの3人でした。

この3人との手紙のやり取りを通じて、世の中の仕組みなどを学びました。今でも印象に残っている言葉があります。元警察庁長官で狙撃事件の被害者である國松孝次さんも言っていたようですが、「国家権力はやりすぎではいけない」「権力は抑制的に使え」です。国家はめつたに間違えないものだが一度間違ったら取り返しがつかないという意味です。国家権力をみだりに使うと、最悪の場合、戦争につながり、国家の破滅を招くこととなります。

また、「二人で良いから本気でやれ」という素晴らしいアドバイスも受けました。東大医学部の学生たちは全学を挙げて国家権力と闘った組織です。東大安田講堂占拠事件に現在感がある医学部で学ぶ私にとって、生き方を教えてくれた言葉でした。

人生の転機になった 福島県立大野病院事件

—— 臨床・研究・教育に従事しながら、政策提言も行われています。どのよ

校に行かせたいと思っていたようです。一方、母親には灘の造り酒屋の血が流れていたこともあり、灘の造り酒屋を営む商人たちがつくった灘高で学んでほしいと願っていたのでしょう。結果、入学試験に合格し、中高一貫の灘中・灘高に進学しました。

—— 灘中・灘高は全国でも有数の進学校として知られていますが、どんな校風でしたか。

上 日本の学校は多くが藩校の系譜で、それに仏教系、戦後はキリスト教系の学校も加わりました。そういうなかで灘高は異色の学校ですが、同じ兵庫県の報徳学園も甲陽学院も、造り酒屋が始めた学校です。

学校の伝統、歴史は普段意識しませんが、教育は自らの伝統、歴史の価値観を植え込んでいくことです。灘高校の伝統、歴史には商売人の価値観があります。お上中心の東京の人々は何かあれば国に頼り、教育についても「国がやれ」と言いますが、関西の人たちの価値観はまったく違います。商人文化の「淀屋橋」文化ならではの価値観があります。お上に頼らずお金持たちが主導し、自分たちの力で決め、実行する文化です。そのためでしょうか、灘高の卒業生には既存の秩序をあまり重視しない人が多いと感じています。

うな経緯で現在の仕事をするようになったのですか。

上 きっかけは福島県立大野病院事件でした。病院で帝王切開手術を受けた産婦(当時29)が失血死し、手術を執刀した同院産婦人科の医師一人が2006年2月に業務上過失致傷と医師法違反の容疑で逮捕された事件です。

直後、知り合いだった亀田総合病院産婦人科の鈴木真医師から電話があり、「事件で容疑者として逮捕された産婦人科医師は私の友人だ。何とかしたい。応援して欲しい」と言われたのです。

そのとき私は民主党の鈴木寛参議院議員(当時)と京都で勉強会を開いていたのですが、鈴木議員からは「刑事事件になると業界が倒れるぞ」と言われました。彼はその場で、仙谷由人さん、舛添要一さんらに電話で連絡しました。仙谷さんは「これはやばい事件だ」と言ってくれました。私は自治医科大学学長を務めた高久史磨先生に電話しました。

そして紹介されたこのメンバーからは「こういう複雑で難しい問題は政治家や厚生労働省に言っても変わらない。メディアで大々的に取り上げてもらい世論を動かすしかない」と、アドバイスを受けました。

そこで私はワイドショーの責任者を

続きは、本誌11月号をご覧ください